様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４３３０２３５

研究課題名（和文）青年期メディアとしての雑誌における教育的機能に関する研究

研究課題名（英文）Cultural studies on the educational functions of Magazine as adolescence Media

研究代表者
佐藤　卓己（SATO, Takumi）

京都大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：８０２１１９４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,000,000円

研究成果の概要（和文）：青年向け雑誌の変容をインターネット普及前から分析することで、書物と新聞の中間(medium)に位置する雑誌メディアの「青年期」的特性を解明した。ウェブはもちろん新聞やテレビも「いま・ここ」に受け手を集中させるメディアだが、雑誌は「近未来」を強く意識させる遅延報酬的なメディアである。この「明日を予感する共同体」の生成に雑誌が果たした役割はきわめて大きい。成果の中間報告は『京都メディア史研究年報』創刊号（2015年4月）に公表した。最終報告は2015年10月に佐藤卓己編『日本の青年雑誌（仮題）』（岩波書店）として刊行される。

研究成果の概要（英文）：By analyzing the transformation of youth magazines before the spread of the internet, the characteristics of adolescence in the magazine media which stands between (medium) books and newspaper media are clarified. The web as well as newspaper and television are the types of media that make the recipient concentrate on “here and now”. However, magazine media is like a delayed remuneration media that makes people strongly aware of the “near future”. The role magazine media has played to create this “fellowship to foresee tomorrow” is very important. A progress report of our achievements are published in “Kyoto Journal of Media History” Vol.1 April 2015. The final report will be published as Sato Takumi ed. “Japanese Youth Magazine” Iwanami Shoten, in October 2015.

研究分野：メディア文化論、メディア史、図書館情報学

キーワード：教育情報システム　青年文化　ゲーム雑誌　雑誌文化　受験雑誌　人生雑誌　情報雑誌　音楽雑誌

１．研究開始当初の背景

本研究「青年期メディアとしての雑誌における教育的機能に関する研究」は、研究代表者・佐藤卓己が先行プロジェクトの成果を踏まえて組織した。特に、挑戦的萌芽研究 2010-2012 年度「『NHK 青年の主張』における青年文化のメディア社会学」（代表者：佐藤卓己）、基盤研究（B）2009-2011 年度「ソフト・パワー構築に向けたメディア文化政策の国際比較研究」（代表者：佐藤卓己）、基盤研究（B）2009-2011 年度「戦後日本における公共圏としての論壇に関するメディア史的研究」（研究代表者・竹内洋）の延長上に組織したものである。さらに青年文化に関心を持つ教育社会学や生涯教育学の研究者を加えて、学際的な「青年期メディア」研究の基盤となる枠組みを描きだすことを目指した。

研究代表者の学問的関心は、雑誌から教育文化を考えることから出発している。例えば、大衆雑誌と「私設文部省」講談社の関係を論じた『「キング」の時代』（岩波書店、2002 年、サントリー学芸賞・日本出版学会賞）、「教育将校」鈴木庫三の雑誌統制を論じた『言論統制』（中央公論新社、2004 年、吉田茂賞）、放送教育雑誌からテレビ文化を再検討した『テレビ的教養』（NTT 出版、2008 年）などで明らかなように、雑誌メディアから教育システムの形成のプロセスを解明する試みであった。

本研究メンバーの多くは、上記の先行研究で代表者と共同作業を続けてきた。今回、分担者としてメディア社会学の福間良明、女性雑誌論の石田あゆう、ジャーナリズム論の河崎吉紀、地域社会学の島岡哉、メディア教育学の赤上裕幸、音楽社会学の長崎励朗、また研究協力者として、教育社会学の佐藤八寿子、さらに当時京都大学大学院生涯教育学講座に所属していた日本学術振興会特別研究員・放送政策学の白戸健一郎（2014 年度に分担者追加）と英字ジャーナリズム研究の松永智子（2014 年度に分担者追加）を加えて、学際的な「青年期メディア」の研究組織を構成した。

研究分担者の研究としては、福間良明『「戦争体験」の戦後史―世代・教養・イデオロギー』（中公新書、2009 年）、石田あゆう「『若い女性』雑誌の時代」『文学』9 巻 2 号（岩波書店、2008 年）、河崎吉紀『戦間期日本の社会集団とネットワーク―デモクラシーと中間団体』（共著、NTT 出版、2008 年）、島岡哉『ポピュラーTV』（共著、風塵社、2009 年）、赤上裕幸『電波・電影・電視―現代東アジアの連鎖するメディア』（共著、青弓社、2012 年）などが、本研究と密接に関連する主要な業績である。

２．研究の目的

本研究のメンバーは、すでに個別領域、個別メディアに関する研究を蓄積している。本研究ではこれらの研究蓄積を基礎として、以下の 3 点を段階的に明らかにする。

1．雑誌というメディアの「青年期」特性：メディア論としては書籍と新聞の中間に位置する雑誌メディアは、「子供」と「大人」の間に位置する「青年」期と相似的な特性をもっている。雑誌は活字的教養の成熟とともに発展し、今日の電子メディア台頭において衰退を迎えている。印刷物の普及が文字の読める「大人」と読めない「子供」を分割し、フィリップ・アリエス「子供の誕生」をもたらし、やがて識字の段階的修得を前提としないテレビによって、ニール・ポストマン「子供の消滅」が生じたことはよく知られている。雑誌のメディア論を踏まえて、青年向け雑誌の機能を具体的に分析する。

2．1980 年代以降の若者文化とメディア接触の連関性：本研究のメンバーは若者向け雑誌ジャンルを精査し、代表的な雑誌に絞って、その変化の意味を読み解く。

3．インターネット時代における教育メディアとしての雑誌の可能性：作業仮説としては、雑誌という媒体が集団の凝集性を高める機能を強く果たしていたと考えている。それは断続的かつ瞬時のウェブ・アクセスではなく、定期的かつ持続的な購読の習慣性が生むハビトゥスだと言い換えることも可能だろう。このハビトゥスは情報化が限界を超えて加速化する現在、青年期の人格形成や社会関係資本の蓄積にとってますます重要だと考えられる。「青年期メディア」としての雑誌の役割に関する包括的見取り図を描く。

これまでの雑誌研究では主に、雑誌の内容分析を中心に出版経営史やジャーナリズム論に重点が置かれてきた。そのため、現代までを視野に入れた射程の長い「青年期メディア」研究はほとんどなされてこなかった。

本研究ではメディア研究のほか、ジェンダー論、文化人類学、社会学、歴史学、広告学、社会心理学など多様なディシプリンの知見を動員して、学際的な「青年期メディア」の見取り図を描くことを目的としている。代表者・佐藤卓己が『ラーニング・アロン―通信教育のメディア学』（新曜社、2008 年）や『テレビ的教養―一億総博知化の系譜』（NTT 出版、2008 年）で示した「教育メディア史」をそのたたき台とする。

３．研究の方法

本研究は、これまでの基盤研究、その他の競争的資金による助成研究によって、その有効性が確認されたメディア研究の基本コンセプトを継承しつつ、教育社会学、歴史社会学、ジェンダー論、文化人類学、広告学などの学際的アプローチを採用する。共同計画は以下 3 つの研究軸、すなわちメディア軸・青年軸・イベント軸により編成され、「青年期メディアとしての雑誌」を包括的に解明することを目指している。すわわち、メディア軸（メディア環境の変容において雑誌媒体を分析）と青年軸（教育システムとの関連から青年期の変容を分析）で先行研究の知見を再編しつつ共有し、イベント軸（今日の若者問題に連なる

テーマ別アプローチ）に従って、各研究分担者・協力者が青年向け雑誌メディアの教育的価値を個別に検討する。

1．メディア軸＝1980 年代以降の情報化によるメディア環境の変容から雑誌を位置付ける（テレビ、ゲーム、インターネット、ケータイなど比較メディア論から雑誌メディアの特性を検討する）

2．青年軸＝青年期の変容を教育システムとの関連で分析する（1970 年代の「青春の終焉」（三浦雅士）以後、青年は「若者」と言い換えられ、さらに「後期こども」（広井良典）と呼ばれるようになる。その変容を雑誌内容において検討する）

3．イベント軸＝テーマ別アプローチ（2008 年リーマン・ショック以降、「若者受難の時代」が喧伝され、ネットカフェ難民、就活超氷河期などを論じる新しい「若者」論が急浮上している。そうした「格差論壇」や「ロストジェネレーション問題」を意識しつつ、エポックとなる青少年問題を各雑誌メディアがどう取り上げたかを比較検討する）

以上の 3 つの研究軸を用いて、本研究では雑誌メディアと青年期の相互連関、青年向け雑誌の衰退とその機能的代替物へと段階的に考察を進める。

第一段階：メディア軸（情報化の中の雑誌）を中心に、イベント軸（テーマ別アプローチ）によって青年向け雑誌の変容を明らかにする（たとえば、1980 年代後半からのバブル経済と 1990 年代の平成不況の間で、青年向け雑誌はどのように変化したか、など）。

第二段階：青年軸（教育システム的アプローチ）を中心に、イベント軸（テーマ別アプローチ）によって、各ジャンルの青年向け雑誌の変化を明らかにする（たとえば、大学の大衆化、あるいは教養の没落との関係で青年向け雑誌の変化を考察する）。

第三段階：上記によって明らかになった雑誌を中心としたメディア環境と教育システムの相互連関を、イベント軸（テーマ別アプローチ）を中心として立体的に比較検討することにより、「青年期メディアとしての雑誌」の可能性を明らかにする。

本研究では、研究代表者、研究分担者、研究協力者のほかに、坂本政謙（岩波書店編集者）をはじめ現場経験のある編集者にも積極的に関与してもらう。具体的な研究の進め方としては、当面は研究参加メンバーのみが利用できるウェブサイトを開設し、メンバーが自由に討論できる場をつくり、さらに公開ウェブサイトで重要な議論や蓄積される資料情報などを発信して行く。このような情報共有ネットワークを基礎に、「青年期メディアとしての雑誌」に関する研究会（略称、青年雑誌研究会）を年間 6～7 回のペースで開催し、メンバーだけではなく、日本マス・コミュニケーション学会や出版学会、教育社会学会、社会学会などの研究者との連携を図る努力を続ける。また、研究分担者、研究協力者が雑誌研究に関連するゼミナールを各所属大学で開設するなど、研究成果が教育にも還元されるように配慮する。

## ４．研究成果

本研究は、インターネット普及前の 1980 年代からの青年向け雑誌の変容を検討することで、雑誌メディアが青年期の人格形成、キャリア・イメージ、あるいは趣味縁など社会関係資本に与えた影響を明らかにすべく着手した。

メディア論から見れば、雑誌メディアの最大の特性は、そのミディウム（中間）性にある。たとえば、紙媒体で考えると、時間的な拘束性あるいは耐久性において雑誌は書物と新聞の中間にある。ストックされる書物は時間に耐えて「古典」となる可能性もあるが、新聞はもっぱら発行日に読まれるフローな情報媒体である。それゆえ「発行日」が持つ意味も、書物と新聞ではまったく異なる。書物は奥付の発行日以後に、新聞はその当日に読まれるのが普通だが、雑誌は月刊であれ週刊であれ発行日の「少し前」に読まれている。つまり、「いま」よりも「近未来」に発行日をもつ雑誌そのものが書籍と新聞の中間に位置する活字文化の「青年期」の象徴なのである。つまり、雑誌は「時間の幅」を前向きに意識させてくれるほとんど唯一のメディアなのである。雑誌の「先取り」志向性は私たちの情報行動にも影響を与えてきた。すなわち、雑誌閲読そのものが近未来に前傾した習慣であり、過去でも現在でもなく一歩先の明日への眼差しを共有する読者を組織化してきたわけである。こうしたインターネットが代替しえない雑誌媒体の教育的機能を明らかにすることで、メディア教育の不可欠な要素として雑誌の機能を確認できた。

この成果の中間報告は『京都メディア史研究年報』創刊号（京都大学メディア文化論研究室・2015 年 4 月）として公刊した。さらに広く成果を社会に還元するため、平成 27 年 10 月に岩波書店より佐藤卓己編『日本青年雑誌論（仮題）』を刊行する。女性雑誌や教養雑誌はもちろん、これまで十分な研究が行われていなかった受験雑誌、人生雑誌、ゲーム雑誌、音楽雑誌、映画雑誌、情報雑誌、無線雑誌、英語教育雑誌などの研究を大きく前進させるものと確信している。

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３９件）


1. 福間良明、「社」と「骨」の闘争―靖国神社・千鳥ヶ淵戦没者墓苑と「戦没者のシンボル」の不成立、京都メディア史研究年報、査読無、創刊号、2015、14-41
2. 赤上裕幸、もうひとつの情報化社会―きたるべき「メディア史の終わり」に備えて、

京都メディア史研究年報、査読無、創刊号、2015、89-114
3.河崎吉紀、ネトウヨとナチスの隔たり―掲示板「２ちゃんねる」の言説分析から、京都メディア史研究年報、査読無、創刊号、2015、115-127
4.石田あゆう、『主婦之友』の新聞広告に見る石川武美の販売戦略、京都メディア史研究年報、査読無、創刊号、2015、128-159
5.白戸健一郎、アマチュア無線家たるための雑誌『CQ ham radio』、京都メディア史研究年報、査読無、創刊号、2015、188-216
6.松永智子、複合文化社会・ハワイの日本語テレビ―テレビ雑誌『Kokiku』に着目して、京都メディア史研究年報、査読無、創刊号、2015、217-237
7.長﨑励朗、「ラジオの夢」の栄光と挫折（書評論文）、京都メディア史研究年報、査読無、創刊号、2015、279-296
8.佐藤卓己、パラダイムシフト　メディアは「教育媒体」になるか、毎日新聞、査読無、10 月 6 日夕刊、2014、文化面
9.福間良明、人生雑誌に映る戦後、世界思想、査読無、41 号、2014、18-22
10.石田あゆう、未婚女性向け実用雑誌の原点―『若い女性』1955-1982、出版研究、査読有、44 号、2014、73-94
11.石田あゆう、オフィスレディのための料理メディア―千趣会＜料理カード＞、Vesta、査読無、93 号（2014 年冬号）、2014、36-37
12.佐藤卓己、〝真宗マスコミュニケーション協会〟という可能性―野依秀市の仏教メディア、アンジャリ、査読無、第 26 号、2013、22-25
13.佐藤卓己、『図書』のメディア史③1969 年－現在、図書、査読無、2013 年 8 月号、2013、22-27
14.佐藤卓己、『図書』のメディア史②1949 年－1968 年、図書、査読無、2013 年 7 月号、2013、20-24
15.赤上裕幸、メディア史は SF メディア史であるべきか、小松左京マガジン、査読無、第 49 号、2013、13-16
16.佐藤卓己、『図書』のメディア史①1936 年－1942 年、図書、査読無、2013 年 6 月号、2013、23-27
17.SATO Takumi、The Moment at Which Books Evolve into “Media”、Raku-yu; Kyoto University Newsletter、査読無、No.23、2013、10-11
18.白戸健一郎、接続する帝国―満洲電信電話株式会社の電話システム、京都大学大学院教育学研究科紀要、査読有、59 号 2013、221-233
19.松永智子、占領期の英語経験と Nippon Times、京都大学大学院教育学研究科紀要、査読有、59 号、2013、235-247
20.白戸健一郎、満洲電信電話株式会社の多言語放送政策、マス・コミュニケーション研究、査読有、82 号、2013、91-110
21.佐藤卓己、雑誌文化と受験システムの親和性、こころ、査読無、10 号、2012、4-5
22.河崎吉紀、社会現象としてのジャーナリズム教育―イギリスにおける高等教育の拡大を中心に、評論・社会科学、査読無、102 号、2012、1-22
23.福間良明、「継承」という「忘却」：「8・6」の祝祭と「平和利用の夢」、わだつみのこえ（日本戦没学生記念会）、査読無、136 号、2012、4-13
24.佐藤卓己、書物がメデイアになるとき―メディア史からの視点、情報の科学と技術、査読有、第 62 巻 6 号、2012、1-6

〔学会発表〕（計２２件）
1.松永智子、メディア史研究者によるソフト・パワー研究の射程、アラブ世界を中心としたメディア文化政策に関する国際比較研究（招待講演）、2014 年 10 月 29 日、東京大学赤門総合研究棟 8 階 840 号室（東京都文京区）
2.白戸健一郎、The Legacy of the Manchurian Telegraph and Telephone Company and the Eastern Asia Broadcasting Network、Breakdown of the Japanese Empire and the Search for Legitimacy (European Research Council)（招待講演）、2014 年 9 月 20 日～2014 年 9 月 23 日、ケンブリッジ（イギリス）
3.黒宮一太・長崎励朗・佐藤卓己、市民的公共圏の光と影、京都文教大学人間学研究所共同プロジェクト「メディア・社会心理学研究の有機的統合に関する共同研究」研究会（招待講演）、2014 年 9 月 03 日、コレギウム京都（京都府京都市）
4.牧野智和・白川浩司・佐藤卓己・竹内洋、教養メディアの輿論と世論―論壇雑誌の戦後史から考える、教育の歴史社会学コロキウム（招待講演）、2014 年 8 月 22 日、関西大学東京センター（東京都千代田区）
5.佐藤卓己、輿論と世論の複眼的思考　東アジアの理性的対話に向けて（基調講演）、第 4 回日台アジア未来フォーラム「東アジアにおけるトランスナショナルな文化の伝播・交流―文学・思想・言語―」（招待講演）、2014 年 6 月 13 日、台北市（中華民国）
6.河崎吉紀・本田毅彦・坂本政謙、ジャーナリストの社会的地位―19 世紀におけるイギリスの職業団体を参考に、日本マス・コミュニケーション学会 2014 年春季研究発表会ワークショップ、2014 年 6 月 01 日、専修大学生田校舎（神奈川県川崎市）
7.佐藤卓己、ファスト政治と〝輿論の世論化〟、京都高等学校社会科研究会（基調講演）、2014 年 3 月 16 日、京都国際交流会館（京都府京都市）
8.佐藤卓己、岩波書店百年にみる出版メディア史、日本マス・コミュニケーション学会第 34 期第 3 回研究会（パネリスト）、2014

年1月13日、共立女子大学（東京都千代田区）
9.河崎吉紀、イギリスにおけるジャーナリスト養成―NCTJ の取り組み、メディア史研究会、2014年02月22日、日本大学（東京都千代田区）
10.佐藤卓己、複眼的思考と理性的対話、日中出版人交流会（招待講演）、2014年3月21日、北京市（中華人民共和国）
11.佐藤卓己、メディアと教養―その〝幸福な時代〟が終わったいま、第7回龍谷学会講演会（招待講演）、2013年11月30日、龍谷大学大宮学舎（京都府京都市）
12.問題提起者・渡邉大輔、討論者・赤上裕幸、司会・長﨑励朗、ワークショップ「日本映画教育史のフロンティア―イメージの過去・現在・未来」、日本マス・コミュニケーション学会秋季研究発表会（メディア史部会）、2013年10月26日、上智大学文学部（東京都千代田区）
13.河崎吉紀、ジャーナリスト資格化の構想―1930 年代のイギリスを中心に、日本教育社会学会、2013年9月21日、埼玉大学（埼玉県さいたま市）
14.Matsunaga Tomoko、English and ‘Imagined Bridging Communities’― Focusing on the history of English-language newspapers in modern Japan、Asian Media Information and Communication Centre (AMIC)、2013年7月6日、ジョグジャカルタ市(インドネシア)
15.長﨑励朗（Nagasaki Reo）、Network Analysis on Asahi Journal― a study about the world of criticism、Asian Media Information and Communication Centre (AMIC)、2013年7月5日、ジョグジャカルタ市(インドネシア)
16.Reo Nagasaki 、Popular Music as Soft-power、The 21st Annual Conference of The Asian Media Information and Communication Centre、2012年7月13日、シャー・アラム（マレーシア）
17.佐藤卓己、メディア史の可能性、日本コミュニケーション学会第42回大会（招待講演）、2012年6月16日、京都文教大学（京都府宇治市）
18.赤上裕幸、ポピュラー音楽と社会関係資本―ポピュラー音楽は細分化するか？統合するか？（司会・コメント）、日本マス・コミュニケーション学会春季研究発表会、2012年6月3日、宮崎公立大学（宮崎県宮崎市）

〔図書〕（計１８件）
1.石田あゆう、青弓社、戦時婦人雑誌の広告メディア論、2015、180
2.毎日新聞社監修、赤上裕幸解説、柏書房、映画教育／活映　復刻版第Ⅰ期、2014、3‐63（赤上裕幸、解説「ポスト活字」社会の黙示録―『映画教育』『活映』復刻にあたって）
3.竹内洋・稲垣恭子・佐藤卓己編、創元社、日本の論壇雑誌―教養メディアの盛衰、2014、350（佐藤卓己、『世界』―戦後平和主義のメートル原器、77-107、佐藤八寿子、『暮しの手帖』―山の手知識人の覇権、133-164、長﨑励朗、『朝日ジャーナル』―櫻色の若者論壇誌、165-183、松永智子、『ニューズウィーク日本版』―論壇は国際化の夢を見る、185-213、赤上裕幸、『放送朝日』―戦後京都学派とテレビ論壇、271-292、白戸健一郎、『日本の論壇雑誌』関連年表、318-342）
4.戸部良一編、千倉書房、近代日本のリーダーシップ―岐路に立つ指導者たち、2014、279-308（佐藤卓己、管制高地に立つ編集者・吉野源三郎）
5.佐藤卓己、中央公論新社、災後のメディア空間―論壇と時評2012-2013、2014、270
6.長﨑励朗、河出書房新社、「つながり」の戦後文化史―労音、そして宝塚、万博、2013、222
7.佐藤卓己、岩波書店、物語岩波書店百年史②「教育」の時代、2013、378
8.宮本徹・大橋理枝・井口篤・佐藤卓己、NHK出版、ことばとメディア―情報伝達の系譜2013、245
9.赤上裕幸、柏書房、ポスト活字の考古学、2013、433

〔その他〕
ホームページ等
http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/satolab/
（メディア文化論研究室）

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤　卓己（SATO, Takumi）
京都大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：８０２１１９４４

(2)研究分担者
福間　良明（FUKUMA, Yoshiaki）
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：７０３８０１４４

石田　あゆう（ISHIDA, Ayu）
桃山学院大学・社会学部・准教授
研究者番号：７０４１１２９６

河崎　吉紀（KAWASAKI, Yoshinori）
同志社大学・社会学部・准教授
研究者番号：３０３８８０３７

島岡　哉（SHIMAOKA, Hajime）
仁愛大学・人間学部・准教授
研究者番号：８０５１３８９５

赤上　裕幸（AKAGAMI, Hiroyuki）
防衛大学校・人文社会科学群・講師

研究者番号：３０６１０９４３

長崎　励朗（NAGASAKI, Reo）
京都文教大学・総合社会学部・講師
研究者番号：３０６３２７７３

松永　智子（MATSUNAGA, Tomoko）
東京経済大学・コミュニケーション学部・講師
研究者番号：６０７３５８０１

白戸　健一郎（SHIRATO, Kenichiro）
東京大学・総合文化研究科・特別研究員（ポストドクタークラス）
研究者番号：８０７３７０１５

(4)研究協力者
佐藤　八寿子（SATO, Yasuko）